

うに思われる。一つは、デイヴィッド・リーンがこの2作品を映画化したものを高校生のときに観て、大いに感銘を受けたことである。もう一つは、没後百年という記念すべき年にめぐり逢ったことだったのだろう。大学院に進学して本格的にディケンズ研究に取り組み初めてみると、英米でも記念論文集や書籍がいろいろと出版され、ディケンズ研究が大いに盛んになっていたことを知ったのだ。

それから37年という月日が流れた。先日、チャールズ・ディケンズ博物館理事長のポール・シュリッケ氏から、2012年に向けての準備について、電子メールが届いた。すでにさまざまな行事が計画されており、それらの調整を行うため、ディケンズ博物館ではワーキング・グループを発足させて、ウェブサイト (<http://www.dickens2012.com>) もたち上がったとのこと。シュリッケ氏によると、同年開催の第106回ディケンズ・フェロウシップ国際大会の開催場所はディケンズ生誕の地ポーツマス、開催時期は夏季と予定されている。一つ注意しなければならないのは、この2012年がロンドン・オリンピックの年でもあることだ。しかもオリンピックは7月27日が開会式という予定だから、もし開催時期が重複すると、ロンドンとその周辺では宿泊場所を確保するのがかなり困難になるだろう。ポーツマスがどのような状況になるかは分からないが、今から入念に準備する必要があることは間違いない。オリンピックと生誕200年祭をどちらも楽しみたいという会員諸氏も、いろいろ作戦を練らなければならないだろう。決して気の早い話ではない。

お祭りもとても楽しみではあるけれど、没後百年のことを思い出してみると、英米で、いや世界中で、ディケンズの再評価がまたまた活発になることが十分に予想される。この30数年間は、文学批評・研究が理論の隆盛によって大きく変容し、それに伴ってディケンズの批評・研究もさまざまに展開、進展してきた。(ディケンズ批評の歴史は『ディケンズ鑑賞大事典』にまとめられている。) 日本支部の会員たちも、英米の学術誌に論文を発表するようになり、この流れに重要な貢献をしてきている。国際性、認知度という点で、日本のディケンズ研究は一代前とは大きく変わっているのだ。このような状況を背景として、日本支部としても2012年に向けて、単なるお祭りだけではなく(フェロウシップの精神からしてももちろんこれも欠かせないが)、学問的事業を企画してもよいのではないだろうか。具体的には論文集などが考えられる。本格的なものを作るためにはかなりの時間を要することが予想されるから、来年あたりから準備にとりかかる必要があるだろう。会員諸氏のご意見やご提案をいただきたいと思う。

この一年間に日本支部は二人の大きな存在を失った。昨年の秋季総会が仙台で開催されていたちょうどその頃、村山敏勝氏が病に倒れていた。村山氏は学問研究へののめり込み方が桁外れの人だった。これからの日本支部を担う人材をここで失ったことは私たちにとって大きな損失である。さらに、つい最近、間二郎氏の訃報が届いた。言うまでもなく間氏は日本支部を長年にわたって支えてきた方であり、『我らが共通の友』(ちくま文庫)の翻訳など多くの貢献をされてきた。お二人の冥福を祈りたい。

## 『ピクウィック・ペイパーズ』の福音主義的側面

The Evangelical Aspects of *The Pickwick Papers*

吉田 一穂

Yoshida KAZUHO

### 序

『ピクウィック・ペイパーズ』(1837)は、チャールズ・ディケンズの最初の小説で、チャップマン・アンド・ホール(Chapman and Hall)社によって1836年4月から1837年11月まで(1837年6月は除く)、シーマー(Robert Seymour; 1798–1836) [Part 1 と Part 2], バス(Robert William Buss; 1804–75) [Part 3], ブラウン(Hablot Knight Browne; 1815–82)の挿絵つきで出版された。

『ピクウィック・ペイパーズ』はウォルター・アレン(Walter Allen)が述べているように、ディケンズの作品の中で最も注目し得る作品の一つであり、多くの人々にとってディケンズの序論とも言える作品であり、快活さ、にぎやかさ、慈善の心が見られる(Allen 20)。一方で、アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)が、「部分的にはあまりにもお粗末な箇所があり、全体としては、今世紀の大人の読者が読みそうなものとはおよそかけ離れている」(Wilson 115)と指摘しているように、支離滅裂で拙劣な部分があることは否めない。グラハム・スミス(Grahame Smith)は、シーマーの自殺の後、ディケンズが不安定な気持ちになっていて、彼の不安がピクウィック氏の人物描写における拙劣な表現の原因であることを指摘しているが(Smith 47)、作品が支離滅裂に感じられる原因は、やはり、作品が即興の産物であったことにある。『ピクウィック・ペイパーズ』の場合、出版社から依頼がきたのが1836年2月10日、それを2月16日に受諾して、2月18日には書き始め、3月31日に第一号の刊行となったので、他の作品のように十分な計画と構成を整える時間がなかった。このことが作品のでき具合に影響を与えていることは間違いないが、支離滅裂な部分はあるものの、『ピクウィック・ペイパーズ』が全く統一感を欠いた作品でないことは明らかである。ダレスキー(H. M. Daleski)が指摘しているように、<sup>1</sup> 作品には後の作品に見られる社会批判の側面がある(Daleski 38)。それだけでなく、読

者に対する影響力ということを見ると、作品に教訓性があることを見落としてはならない。ディケンズは、巧みなストーリーテリング、すなわち、挿話や父と息子のテーマなどを用い、作品を通して読者に教訓を与えていると考えられるのだ。挿話や父と息子のテーマを通して作品を考え、教訓性を読み取る際、浮かび上がってくる作品の側面がある。それは、作品に福音主義的側面があることだ。福音主義派とは、1785年頃にメソヂストが英国国教会から分離した後も、国教徒として留まった人々をいう。福音主義運動は、宗教的な一勢力として、1790年代から1830年代にかけて最も重要なものであった。福音主義が掲げる道徳的規範、忌避すべきもの、厳格な規律、人間がなすべき務めへの献身は、ヴィクトリアニズムと言ってもよく、社会に独特の道徳的気風を付与した。オールティック (Richard D. Altick) は、福音主義が、想像力を刺激して現実の知覚を誤らせると信じられていたがゆえに、小説を禁書目録の筆頭に挙げていたと述べる一方、ディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』が現れたとき、世俗的な小説に対する福音主義派の抵抗は緩和された、と指摘している (Altick 191)。ただオールティックはなぜ『ピクウィック・ペーパーズ』が現れたとき、世俗的な小説に対する福音主義派の抵抗が緩和されたのか詳述していない。これは、作品の中に福音主義的側面があるからではなかろうか。また、ロバート・ニューサム (Robert Newsom) は、『ピクウィック・ペーパーズ』の中心的テーマとしてクリスマスを読み取り、ゲイブリエル・グラブ (Gabriel Grub) をディケンズ初期の作品に見られるスクルージ (Scrooge) と考えているが (Newsom 67)、作品の福音主義的側面について具体的に述べていない。

本論文では、『ピクウィック・ペーパーズ』を挿話や父と息子のテーマから考え、作品の教訓性と教訓性から垣間見られる福音主義的側面について述べてみたい。

#### 1.4つの挿話

作品の教訓性を考えるにあたり、無視できない部分がある。それは作品に多く見られる挿話である。スミスは、『ピクウィック・ペーパーズ』は全てのディケンズの小説の中で最も挿話の多い作品である、と述べている (Smith 164)。作品においてそれぞれの挿話は全く関係がないというわけではなく、教訓性を持つという点で、関連性がある。もともとピクウィック・クラブの通信部は、彼らの旅行・調査、風俗習慣の観察、その冒険すべての正確な報告、地方の風景や地方におけるかわりあいがひきおこす物語と記録をすべて、折りにふれて、ロンドンのピクウィック・クラブに提出することを任務としているが、第2章でピクウィック氏がジングル (Jingle) に自身のことを説明しているように、

彼が「人間性の観察者 ('an observer of human nature'; 11) であることを忘れてはならない。ディケンズが挿話を提示することの意味は、「人間性の観察者」であるピクウィック氏が物語に接することにより、人間性を考察するだけでなく、読者へ教訓を与えていることにあると考えられる。ここでは、4つの挿話について考えていきたい。

まず、第3章における陰気なジェミー (dismal Jemmy) によって語られる「旅役者の物語」 ('The Stroller's Tale') について考えてみたい。ジェミーが話す男は、低俗なパントマイムの役者で、常習の飲んだくれであった。彼は、放蕩で体を弱らせ、病気でやせおとろえる前の元気なころ、そうとういい俸給を受け取っていたが、酒場に通り続けることにより職にありつけず、パンにもこと欠く状態になる。ジェミーは、「もし彼が注意深く慎重な男だったら、彼は長い年月とはゆかずとも、少なくとも数年間は、それを受けつづけることができたでしょう。というのも、こうした人たちは、若死にするか、体を使いすぎて、生活のただひとつの資本になっている体力を永久に失ってしまうからです」 (35)、「もし、彼が同じ道を進み続けたら、手当てを受けぬ病氣と絶望的な貧乏が彼の身を襲うことは、死それ自身と同じように、確実なことでした」 (35) と語るが、ジェミーの語りは挿話において重要な意味を持っている。なぜならば、ジェミーの語りは、男の末路を暗示しているだけでなく、酒で身を滅ぼす危険性をも読者に訴えているからだ。ジェミーは男の病床を見舞い、彼の様子を読者に伝える。男は夢遊病者のようになり、劇場と居酒屋についてうわごとを言ったり空想したりし、発作を起こして死んでいく。妻を殴り、妻と子供に飢えの苦しみを味わわせたことに罪の意識を感じ、妻に復讐され殺されると感じている男の姿は、酒で身を滅ぼすと家族でさえ信じられなくなり、不幸になることを暗示している。「旅役者の物語」において、ディケンズは、酒は人生を愉快にさせるものである一方で、限度を超すと、人生や家庭を崩壊させてしまう危険性を持っているので、自制心が必要であることを示している。

次に第6章でピクウィック氏一行にディングリー・デル (Dingley Dell) の牧師が話す「囚人の帰還」 ('The Convict's Return') について考えてみたい。牧師が語るのは、エドマンズ (Edmunds) の息子ジョン・エドマンズ (John Edmunds) についてであるが、牧師が父親のエドマンズが家族にもたらす悲劇についても語っていることを見落としてはならない。父親のエドマンズは、むっつりした、あらあらしい気質の悪人で、なまけ者で放縦、むごくて兇悪な性格を持っていて人々に避けられていた人物である。彼もまた、陰気なジェミーが語る役者のように、酒に溺れ、家族はその被害を受ける。息子のジョンは、自分のために、困窮しながら、父親からの虐待、暴力を忍んでくれて

いたにもかかわらず、母親の心を顧慮せず、墮落して世から捨てられた人間と仲間になり、盗難事件を起こし、逮捕され、拘禁され、裁判にかけられ、死刑の判決をくだされる。その後減刑を受け、14年間の流刑になるが、流刑地に行く前に、監獄の中庭に立って毎日毎日、愛情と懇願で強情な自分の息子の心をやわらげようとしていた母親が病気になって倒れる。牧師は、心にふりかかった懲罰が冷淡と無関心を装っていたジョンを狂乱状態に追いやったと説明するが、両者が監獄の壁にはばまれ会えないので、母親の赦しと祝福を監獄にいる息子のところへ持ってゆき、息子の厳粛な悔恨の保証と赦しをねがう熱烈な気持ちを彼女の病床へもたらす。母親は間もなく死ぬが、ジョン・エドマンズは14年間の刑期が終わると、生まれ故郷に帰ってくる。注目に値することは、牧師が教会に入ったジョンが見る聖餐台を説明するにあたり、「彼が子供としては尊敬し、大人としては忘れてしまった十戒をその前で何回もくり返して唱えた聖餐台」(48)と説明することである。ディケンズは、すでに母親の愛情を裏切り向こう見ずな生活を送っていたジョンについて説明する際、「人間性とは悲しいもの」(‘Alas for human nature!’; 76)と述べているので、十戒を持ち出すことにより、ジョンが十戒に背いていること、あるいはこれから背くことを印象づけている。ジョンは、父親と再会するが、父親にステッキで顔を激しく打たれたので、「おやじー悪魔め！」(‘Father-devil!’; 81)と言い、喉をつかみ絞め殺してしまう。すなわち、ジョンは、十戒の「あなたは盗んではならない」(Exodus 20:15)だけでなく、「父と母を敬え」、「あなたは殺してはならない」(Exodus 20:12-13)に背いたことになるのだ。牧師は最後に、この事件の後、ジョンが本当に心を改め、後悔し、謙虚になったと説明するが、この物語は、父親の存在がいかに子供に影響を与えるかを示しているだけでなく、いかなる状況にあらうと、子供は更生できるということを読者に教えている。また、神の律法に背いて神との正しい関係から墮落してしまった人間でも、悔い改めることにより、更生が可能であることを示している。ジョンの父親は、子供を殺す否定的な父親であるが、ディケンズはこの物語によって、子供を教育し、良心を呼びさます父なる神が存在することを印象づけていると考えられる。罪深い人間がいかに救われうるかを読者に示しているこの挿話は、救いは改心と神の意志への服従によって達成されるとする福音主義を思い起こさせる。

付け加えておきたいことは、ディケンズが「旅役者の物語」だけでなく「囚人の帰還」においてもヴィクトリア朝時代における酒の問題を取り上げていることである。より有害でないレクリエーションが都市のスラム街や工場都市で手に入らないとき、労働者の男性も女性も、泥酔することに唯一の慰めを見出していた。当時の犯罪報道は、過度の飲酒に起因した身体傷害や明白な謀殺に

まで及ぶ、残虐事件であふれている。<sup>2</sup> その道徳的な悪影響は別にしても、過度の飲酒は労働者の生産性を低下させ、常習欠勤を増大させるものであった。それゆえ、道徳的理由と実用主義的理由が一体となって、宗教団体は果てしない一連の絶対禁酒運動を支持したのである(Altick 184-85)。厳格な福音主義は風俗改善の一環として、飲酒の習慣が蔓延することを防ごうとした。特にメソヂスト派は、アルコール依存症が労働者に深刻な影響を与えているとして、禁酒を訴えた。サム・ウェラー(Sam Weller)の義理の母親は、メソヂスト派に入れ込んでいて、禁酒協会の月例会に出席している。<sup>3</sup> ディケンズは自身の作品の中で禁酒を訴えてはいないが、<sup>4</sup> 二つの挿話において、主に道徳的理由から酒の害を読者に訴えていると考えられる。

次に第11章でピクウィック氏が読むディングリー・デルの老牧師の原稿「狂人の手記」(‘A Madman’s Manuscript’)について考えてみたい。「狂人の手記」は、精神異常者の独房で書かれたものであるが、狂人は、彼の病気の進行を説明するだけでなく、病気が遺伝性のものであると説明する。狂人は、狂気の子孫に伝える運命をもった不幸な子を妻が死ぬ前に生み落とすかもしれないと考え、彼女を殺す。女性の兄弟のうちで一番傲慢な男が、妹が別の男を愛していたにもかかわらず、妹をむりやり狂人と結婚させようとした立役者であった。その男は、狂人の金と妹の悲運により陸軍の将校となったが、狂人の富を奪おうとした計画の主謀者であった。狂人は、傲慢な兄に対し、「この悪党め、お前のことはわかっていたのだ。わたしはわたしに対するお前のひどい陰謀を知っていたのだ。お前がむりに彼女をわたしと結婚させる前に、彼女の心は他の男と結ばれていたのをわたしは知っているのだぞ」(145)と言い、妻の兄を殺そうとするが、捕えられ、監禁状態に追いやられる。見落としてはならない点は、原稿の終わりのところに、説明が書かれていることである。その説明によると、不幸な男は、若いころに精力の使い方をあやまった有害な結果の一つの例であり、若い時代の考えなしな放縦・放蕩・道楽が熱病と狂乱状態を生み出したのであった。ジョン・R・リード(John R. Reed)は、「狂人の手記」について狂人が後悔せず、自身の行動を親ゆずりの性格のせいにしてしていることに注目しているが(Reed 71)、責任を否定することにより、狂人が地獄のような状態に陥っていることは明らかである。彼は、恐怖につきまとわれ、哀れみを受けず、良心が欠如しているがゆえに残りの人生を幻覚症状で閉じこめられたようになっていて、これから先ますます悪い状況になるよう運命づけられている。「狂人の手記」の特徴は、「囚人の帰還」と同じように、親の子供に対する影響を暗示している一方で、極限的状况を見せることにより、狂人の絶望的状况は、たとえ親の影響があったとしても成長過程において、個人が良心と

自助努力により人生における諸問題を解決できる可能性を示していることにある。老牧師の説明、すなわち、狂人が放縦・放蕩・道楽により、自ら狂乱状態を招いたという説明は、「囚人の帰還」と同じように、牧師が説明することにより、教訓性を持つことになる。牧師の役割の一つは、父なる神の存在を伝えることであるので、ディケンズは、牧師に語らせることにより、父なる神の価値規範と良心の重要性を訴えているかのようである。また、牧師の説明は、無節制、放蕩生活に対し厳格な福音主義を示しているかのようでもある。

次にウォードル (Wardle) によってピクウィック氏に語られる「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」(‘The Story of the Goblins Who Stole a Sexton’) について考えてみたい。ゲイブリエル・グラブはふきげんで、片意地の無愛想な男で、柳細工の酒のびん以外の誰ともつき合わない男であった。グラブは、ある少年が陽気なクリスマスについての歌を歌っているのを耳にし、腹を立て声を抑えさせるためカンテラで彼の頭をたたく。ゲイブリエル・グラブは、夜の墓掘り仕事を終え休憩するが鬼が現れ、「クリスマス・イブにお前は何をしているのか?」、「他の人間が陽気な気分にいるとき、誰が墓をつくりそれを楽しんでいるのだ?」(400) と言い、少年が陽気になれ、自分が陽気になれないからと言って、その少年を嫉妬のこもった悪意でたたいた男を知っていると言う。鬼の王さまは、何枚かの絵を見せる。楽しそうな一家の様子、子供の死、子供の死後もけなげに陽気に暮らす人々を示した後、鬼の王さまが「お前はみじめな男だよ!」(403) と言ってゲイブリエル・グラブを蹴つとばした後、他の鬼たちも彼を蹴つとばす。鬼たちの行動は、明らかにゲイブリエル・グラブの生き方に対する懲罰の意味を持っている。鬼の見せる光景は、彼に多くの教訓を示す。ゲイブリエル・グラブは、一生懸命に働き、無知であっても貧困であっても陽気さを失わず、逆境に負けず、けなげに生きている人たちがいることを学び、他人の楽しみと陽気さにガミガミ怒る彼自身のような人間が、美しい地上の一番きたない雑草であることを学ぶ。ゲイブリエル・グラブは改心し、生まれ変わった人間になるが、重要なことは、鬼が『クリスマス・キャロル』(1843) においてスクルージを改心に導いた精霊のごとき役割を果たしていることである。リードは、『ピクウィック・ペイパーズ』の挿話の中に罪と赦しのパターンを見てとっている (Reed 71)。ゲイブリエル・グラブの話の特徴は、彼自身の父親は現れないが、鬼が父親のごとく彼に懲罰をもたらし、改心に導くことである。「狂人の手記」の狂人は、狂気を遺伝の責任にし、教えを学ぶことなく、自らまねいた地獄にとどまったままである一方 (Reed 71)、ゲイブリエル・グラブの話は、彼自身が学び改心するがゆえに救いがあると言える。

## 2 父と息子のテーマ

ここで、『ピクウィック・ペイパーズ』に見られる父と息子のテーマに目を向けてみたい。先に述べた「囚人の帰還」と「狂人の手記」だけでなく、『ピクウィック・ペイパーズ』において顕著なことは、ディケンズの自伝的部分が見られることである。その自伝的部分とは、ディケンズ自身のマーシャルシー (Marshalsea) 監獄と父親の記憶である。ディケンズの父親 (John Dickens) は、生来陽気な人で仕事熱心であったが、経済観念に乏しい人であった。1824年2月20日とうとう40ポンドの借金が払えないために、父親は逮捕され、マーシャルシー債務者監獄に投獄されてしまった。この前に、チャールズは12歳でストランド (Strand) のハンガーフォード・ステアーズ (Hungerford Stairs) にあったウォレン (Warren) 靴墨工場へ働きに行っていたが、父親が投獄され、家族と離れて靴墨工場で働かなければならなかったことは、鋭敏で学問で身を立てようとしていた少年に、筆舌に尽くし難い苦悩と絶望感を与えたのであった。このとき受けたディケンズのトラウマ (傷痕) は、生涯彼の心につきまとうことになった。ディケンズのこのときの心境は、『デイヴィッド・コパフィールド』(1850) においてデイヴィッドが語るマードストーン＝グリンビー (Murdstone and Grinby's) 商会でこきつかわれる下働き小僧という地位からくる屈辱感や情けない気持ちに読み取れる。靴墨工場でのディケンズの体験は、ディケンズがいかに家庭が重要であるか、また、父親の存在がいかに家庭の中で重要であるか、子供の立場から知るきっかけとなったできごとであったと考えられる。

ディケンズのマーシャルシー監獄と父親の記憶は、形を変え『ピクウィック・ペイパーズ』に現れていると考えられる。第21章の挿話「奇妙な依頼人に関する老人の話」(‘The Old Man’s Tale about the Queer Client’) において、マーシャルシー監獄は次のように描写されている。

In the Borough High Street, near Saint George’s Church, and on the same side of the way, stands, as most people know, the smallest of our debtor’s prisons, the Marshalsea. Although in later times it has been a very different place from the sink of filth and dirt it once was, even its improved condition holds out but little temptation to the extravagant, or consolation to the improvident. The condemned felon has as good a yard for air and exercise in Newgate, as the insolvent debtor in the Marshalsea Prison. (284)

この引用において、老人は、浪費家にとってマーシャルシー監獄がいかに居

心地の悪い場所であるかを伝えている。ディケンズは、老人の言葉を通して自身の父親とかつての記憶を復元しているかのようだ。ただディケンズは、かつての記憶を利用しているものの想像力により全く別の話を作り出している。

ヘイリング (Heyling) は、債務者監獄に入れられている間、息子と妻のメアリー (Mary) の死に直面する。妻が死んだ日の夜、ヘイリングは、神をおそろしい誓いの証人にし、妻の死と息子の死の復讐に献身することを誓う。ヘイリングは、親の財産が手に入るにより監獄から自由になるが、自身を監獄に投げこみ、妻と息子が慈悲を求めたとき、家から追い払った人物、すなわち、妻の父親に対する復讐計画を実行する。ヘイリングは老人の息子が海で溺れているのを見るが、助けず見殺しにするだけでなく、弁護士を使い、老人を破産に追いこみ、彼を死に追いやる。

この話では、幼い息子は、父親の影響を受け死んでしまうので、父親が釈放されなかったら、自身もそうだったかもしれないというディケンズの悲劇的ヴィジョンを感じさせる一方で、父親がいかに家族に影響を及ぼすかを示している。しかし、もっと重要なことは、ヘイリングが復讐心を持ち続けることにより、コントラストという観点からメイン・プロットと無関係ではないと考えられることだ。ピクウィック氏もまたフリート (Fleet) 監獄に入れられるが、彼は復讐を実践するヘイリングとは対照的に「赦し」を実践する。もともとピクウィック氏の投獄は、バーデル (Bardell) 夫人の誤解によるものである。ピクウィック氏は、「白雄鹿旅館」で靴みがきをしていたサミュエル・ウェラー (Samuel Weller) に注目し、彼を従者にすることを決め、その決意を女主人バーデル夫人に告げようとするが、彼女は結婚の申し込みだと勘違いしてしまう。その結果、ピクウィック氏は婚約破棄によりバーデル夫人に訴訟を起こされ、損害賠償と訴訟費用を支払わないことにより、フリート監獄に投獄されてしまう。フレッド・カプラン (Fred Kaplan) は、「フリート監獄におけるピクウィック氏の監禁は、ジョン・ディケンズの監禁と平行する部分はあるが、それを超越するものである」と指摘しているだけでなく、「ピクウィック氏は意識して道徳的な誠実さをつらぬくがゆえに、彼の自由の喪失は、より遠大な自由への上昇である」(Kaplan 83) と述べている。カプランが述べているように、ピクウィック氏は、損害賠償と訴訟費用を支払わないことにより、精神的自由を獲得するが、それ以上に重要なことは、彼が「復讐」に走らず「赦し」を実践することである。彼は自身を監禁状態へ追いやったバーデル夫人を赦し、彼女の訴訟費用を払うだけでなく、レイチェル・ウォードル (Rachael Wardle) のロマンティックな感情につけこみ、彼を欺いた悪党ジングル (Jingle) をも赦し、彼を更生させる。自身の子供時代の痛ましい経験について経済的に無能力な父親

の責任だと感じていたディケンズは、過去のできごとを作り変え、ピクウィック氏を周囲にとっての理想的父親にしている。それだけではなくディケンズは、ピクウィック氏の描写を通して、愛の実践の重要性と罪深い人間が改心できる可能性を示している。

メイン・プロットにおけるピクウィック氏の役割は、ピクウィック氏の行動を通して示される。このことは、『リトル・ドリット』(1857)において、「マーシャルシー監獄の父」と呼ばれていたウィリアム・ドリット (William Dorrit) とピクウィック氏を比較してみると明らかである。莫大な遺産の相続人となり監獄を出たウィリアムは、伯爵や侯爵とばかり付き合ったせいか娘たちにも實際上立派な立居振舞ができるよう望むが最も簡単な父親らしいことができない。彼は上品さへの夢のため、二人の子供の気質を損なうこともいとわないからだ。一方でピクウィック氏は、監獄を出た後、事務弁護士であるパーカー (Perker) にすすめられ、ひそかにアラベラ・アレン (Arabella Allen) と結婚したナザニエル・ウインクル (Nathaniel Winkle) と彼の父親との間を取り持つ。パーカーは、ピクウィック氏に息子のウインクルの将来の遺産相続の見込みは、父親のウインクル氏が前に変わらぬ親愛の情で彼の身を考えることだけにかかっていることを言う。また、パーカーは、父親のウインクル氏はピクウィック氏を、ある程度、息子の保護者・忠告者と考えてもよいこと、父親のウインクル氏に直接口頭で、できごとの全貌と自分がとった役割を知らせるのがピクウィックの当然するべきことであると言う。ここで、パーカーが言う言葉「保護者」(‘guardian’; 665) としてのピクウィック氏の役割に注目したい。ウインクルには実際の父親がいるので、ピクウィック氏の作品における役割は、救済手段としての役割であると言っている。

ディケンズは、第36章でピクウィック氏が読む文章「ブラダッド王子の伝説事実談」(‘The True Legend of Prince Bladud’)において、父と息子のテーマを扱っている。ラッド (Lud) 王には一人の息子がいるが、彼は王子を隣国の王の娘と政略結婚させようとする。しかし、王子はすでに恋におちいりアテネの貴族の娘と婚約していたのであった。ブラダッド王子は、父王にこのことを打ちあけるが、父王は怒りに怒り、息子を高い塔の中に閉じこめる。後に塔から出てさまよい歩いていた王子は、自身が結婚したいと思っていた貴族の娘がすでに同じ国の貴族と結婚したことを農夫から聞き、悲しみにくれる。彼は、「私の放浪がここで終わってくれたら！見当違いの希望と捨てられた愛情を私がいま嘆いているこのありがたい涙が、いつまでも平和に流れ続けたら！」(511) と言う。彼の願いは聞きとどけられ、異教の神々は、彼の願いをかなえる。王子の足もとで大地が開き、彼はその割れ目の中に沈み、その後すぐ、彼の頭上

でそれは永遠に閉ざされ、地面を通して彼の涙が湧きあがり、その後ずっとそれが噴き出しつづけることとなる。さらに、この手記の最後には、「今日にいたるまで連れ合いを得ることができなかったたさんの初老の男女、それを得ようとしている同じくらいたさんの若い人たちは、鉱泉水を飲むために、年々バス (Bath) におもむき、それから多くの力づけとなぐさめを得ている」(511)と書かれている。

この箇所は、父親との関係において不幸になった息子の話の後に続くことにより、ピクウィック氏の行動に影響を与える可能性がある。彼は、ひそかにアラベラと結婚したウィンクルと父親の間を取り持つが、「ブラダッド王子の伝説事実談」から影響を受けることにより、不幸な若者を救おうと考える可能性があるのだ。ディケンズは、父親により子供がいかに影響を受けるか、父親が子供を生かすもし殺すもすることを示すだけでなく、父親の犠牲とならないように、ピクウィック氏を救済手段として用いたと考えられる。救済手段としてのピクウィック氏を考えるとき、浮かび上がってくるのが「父なる神」としての役割である。例えば、旧約聖書において羊飼いの少年ダビデ (David) は、神によってイスラエルの第2代目の王として選ばれたにもかかわらず、サウル (Saul) 王は自分の地位を奪ってしまう者だとしてダビデを捕らえにかかる。逃亡生活の間、ダビデは神を信頼し、困難を乗り越える。逃亡生活においてダビデの支えとなったのは、「父なる神」の保護である。

ディケンズはこのような保護者である「父なる」神としての役割をピクウィック氏に与え、救済手段として彼を用いたのではなからうか？またディケンズは、ピクウィック氏の行動を通して人間の理想的生き方、すなわち、他者の幸福に寄与する生き方を提示していると考えられる。<sup>5</sup>

ヴィクトリア朝時代において、福音主義が人々の思想に大きな影響を及ぼしていた。聖書の言葉が毎日家庭で目にされ、耳にされていた(家庭礼拝と聖書の朗読が、ヴィクトリア朝の家庭生活の日課に対して福音主義者たちのなした主要な貢献である)というだけではなかった。聖書からの引用が、教会や礼拝堂での説教に、日曜学校での学課に、平日の祈禱や信仰復興運動の集会での礼拝に、貫流していたのである。宗教の言語はまた、学校の中の言述に影響を与えた。ヴィクトリア朝の民衆教育の大部分は、非国教徒と英国国教会の宗教団体によって行われていた。その結果として、ごく若い頃から、社会のあらゆる階級で、家庭においても学校においても、ヴィクトリア朝の人々は、今日ではほとんど想像も及ばないほど、聖書の言語と物語になじんでいたのである(Altick 191-92)。オールティックが指摘しているように、福音主義は、プロテスタントの敬虔主義の一種であり、教理や礼拝の形式よりも、むしろ人々の生

き方を重視した。人々は、来世の準備としての人生に関心を持っていた。聖書はこの上なく文字通りに解釈され、行為の最高の手引きであった(Altick 165-66)。作品におけるピクウィック氏の行動は、登場人物の救済手段であるだけでなく、人間はいかにしたら救われるかを明示する意味があるのだ。

### 結び

以上、『ピクウィック・ペイパーズ』の教訓性と教訓性から垣間見られる福音主義的側面を考えてきたが、ディケンズのいくつかの挿話は、メイン・プロットと無関係ではないと言える。「陰気なジェミー」、「囚人の帰還」は、父親が身持ち悪く生活すると、家族や子供に悪影響を及ぼす可能性を示している、いかに父親の役割が大切か、また父親が正しく家族を導く必要性を読者に教えてくれる。作品においてディケンズは、マーシャルシー監獄に投獄された父親と自身の辛い過去の記憶を効果的に用いていると考えられるが、「狂人の手記」では親ゆずりの性格の責任にし、自ら狂乱状態を招いたことを反省していない狂人を示すことにより、また「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」では、改心するゲイブリエル・クラブを示すことにより、人間はいかなる父親を持つと自身の人生を自分で変えたり作ったりできる可能性を示している。一方でディケンズは、「奇妙な依頼人に関する老人の話」では復讐に走るヘイリングを示し、メイン・プロットでは対照的に赦しを実践するピクウィック氏を示すことにより、人間の理想的生き方を提示している。ディケンズは、自身の記憶を作り変えることにより、読者に父親や境遇がいかなるものであろうと、人間は自分自身で人生を上げる責任があることを示している。さらに「ブラダッド王子の伝説事実談」の後、救済手段としてピクウィック氏を用いることにより、実際の父親がどうあろうと「父なる神」が存在し救いがあることを印象づけているように思われる。「狂人の手記」の牧師の説明は、無節制、放蕩生活に対する福音主義の厳格な側面を示しているようであるが、「囚人の帰還」と「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」では、改心によって人間は救われることを教えている。このことは、ディケンズがその生涯において春春婦や囚人の更生に関心を持っていたことを思いおこさせる。福音主義者たちは、人々の生き方に関心を持つ一方、人道主義的関心を持っていたが、<sup>6</sup>ディケンズは、『ピクウィック・ペイパーズ』において福音主義の両方の側面を描き出していると考えられる。後に『リトル・ドリット』(1857)でディケンズは福音主義者たちの運動の中の安息日遵守主義がアーサー・クレナム (Arthur Clennam) の精神を束縛するものであることを示し批判的である。一方でディケンズは、前期の作品『ピクウィック・ペイパーズ』において、福音主義の厳格な側面を示しつつも改心

や救済の可能性を示している。このことから、『ピクウィック・ペーパーズ』は、ディケンズの福音主義の人間を更生させる力や人道主義的社会改革への期待の片鱗を窺わせる作品である、と言っていいだろう。

### 注

- ダレスキーは、『ピクウィック・ペーパーズ』における社会批判は、激しいものではないかもしれないが、後の作品を考慮に入れると、我々は、社会批判の暗示が作品に含まれていることに気づかざるをえない」と述べている。ダレスキーは、『荒涼館』では完全な確信になったが、ドッドソン (Dodson) やフォッグ (Fogg) のような人物が社会を腐敗させる原因になることをディケンズは理解する途上であった」、また、『リトル・ドリット』においては理解していたが、債務者監獄がそれを許容する社会の縮図であるかもしれないと理解する途上であった」と考えている (Daleski 38)。
- 当時の犯罪報道に関し、でっち上げられたセンセーショナルな事件が多かったことがヘンリー・メイヒュー (Henry Mayhew) の *London Labour and the London Poor* で言われているが、一方でメイヒューは、*The Morning Chronicle Surveyor of Labour and the Poor* で飲酒が犯罪の原因になっていること、酔っぱらった労働者階級が犯罪を犯す可能性が高かったことを指摘している (Mayhew 40)。クライブ・エムスリー (Clive Emsley) は、飲酒の悪影響について、1834年の *Parliamentary Paper (Select Committee on Inquiry into Drunkenness)* に、監獄や牢獄船 (hulks) が被收容者であふれかえっていて、飲酒により酔っぱらうことによる異常な道徳的墮落が犯罪の一因であると書かれていることに注目している (Emsley 66)。ドナルド・トマス (Donald Thomas) は、12～14歳の少女が売春や犯罪に走る家庭内の原因として、死や海外における軍務による父親不在により母親が働きに出なければならず、娘を十分に監督できないことを挙げている。さらにトマスは、少女が犯罪を犯す一因として飲酒を挙げている (Thomas 86)。
- 自らが飲んだくれであるのに、連合グランド・ジャンクション・エベニーザ禁酒協会 (The United Grand Junction Ebenezer Temperance Association) に出席し、禁酒を促進させようとするスティギンズ (Stiggins) は偽善者と言っていい存在である。
- ディケンズは『ボズのスケッチ』の「ジン・ショップ」(‘Gin Shops’) の末尾で、貧困な労働者階級に蔓延する飲酒の悪弊をひどく嘆き、「ジンを飲むことは英国の大いなる悪徳である」と述べている。『ピクウィック・ペーパーズ』では、第19章で冷えたパンチを飲んで酔っぱらったピクウィック氏は、ボールドウィック (Boldwig) 大尉により猥褻に入れられてしまう。ボールドウィック大尉に対し、監禁の罪で裁判を起こしてやる、と言うピクウィック氏に対し、ウォードルは冷えたパンチを飲みすぎたせいだと言われるかもしれないので、やめるように言う。このことにより、ディケンズは酒が冷静な判断力を失わせる可能性があることを示している。しかし、ウォードルの言葉の後、ピクウィック氏が上機嫌になり、居酒屋で水割りブランデーを皆に注文することから、ディケンズは酒を娯楽として楽しむことが捨てがたいことも描き出している。このことから、ディケンズが飲酒の楽しみを認めながらも、飲みすぎると悪影響を及ぼすので、限度が必要だと考えていたと思われる。
- オールティックは、説教師スティギンズの人物描写をディケンズの福音主義者に対する風刺ととらえている (Altick 200)。自身を迫害を受けている聖者だとし、同情を集め水道料金を人々から受け取る彼は、福音主義的観点から改心すべき人

物であると言っていい。ピクウィック氏は行動によって他者の幸福に寄与していることから、スティギンズとは対照的な人物である。

- 福音主義者たちの広範囲にわたる人道主義的な関心は、彼らを促して多くの博愛主義的・伝道的組織を創設させた。「零落した良家の女性たちのための婦人連合会」、「うらぶれた、善良な性格の、貧しい、貧弱な、老寡婦および独身女性救済のための婦人友愛協会」、「売春婦に臨時保護施設を提供することによって公衆道徳を維持するための保護協会」、「貧民孤児、特に立派な両親の血を引く者たちの収容と教育のためのロンドン孤児院」、「ヘルニアを起こした貧民の救済のための全国ヘルニアバンド協会」、「若い女性を田舎と友人たちのもとへ帰郷させる協会」、「(「仮死状態にある人」を蘇生させるための) 投身者救助会」など、福音主義者たちはあらゆる不測の事態を取り扱う団体を持っていたようである (Altick 180-81)。福音主義における人道主義の顕著な成果は、ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) の奴隷制反対に見られる (Altholz 273)。クラパム・セクト (Clapham Sect) の有力会員であったウィルバーフォースは、1787年に奴隷貿易廃止協会を設立し、1823年には奴隷制反対協会を設立した。工場と炭鉱での労働時間を制限する運動を指導したシャフツベリー (Shaftesbury) 卿 (1801-85) がアングリカンの福音主義者だったことも見落としはならない (サイクス 150-53)。

### 引用文献

- Allen, Walter. "The Comedy of Dickens", in *Dickens 1970*. Ed. Michael Slater. London: Chapman, 1970. 3-27.
- Altholz, Joseph L. "Evangelical Movement", in *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Ed. Sally Mitchell. London: Garland, 1988. 272-74.
- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: Norton, 1973.
- Daleski, H. M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber, 1970.
- Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. New York: Oxford UP, 1987.
- Emsley, Clive. *Crime and Society in England 1750-1900*. London: Longman, 1996.
- Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. London: Longman, 1984.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: Johns Hopkins UP, 1998.
- Mayhew, Henry. *The Morning Chronicle Surveyor of Labour and the Poor: The Metropolitan Districts*. Firlie: Caliban, 1980.
- Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne, 2000.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Smith, Grahame. *Charles Dickens: A Literary Life*. London: Macmillan, 1996.
- Thomas, Donald. *The Victorian Underworld*. London: Murray, 1998.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin, 1970.
- オールティック, リチャード・D. 『ヴィクトリア朝の人と思想』。要田圭治／大嶋浩／田中孝信訳, 東京: 音羽書房鶴見書店, 1998年。
- サイクス, ノーマン. 『イングランド文化と宗教伝統』。野谷啓二訳, 東京: 開文社, 2000年。